

# 令和4年度全国高等学校総合体育大会陸上競技大会 報告書

一般財団法人 徳島陸上競技協会  
専務理事 難波 康夫

1. 期 日 令和4年8月3日(水)～8月7日(日)
2. 会 場 鳴門・大塚スポーツパーク ポカリスエットスタジアム
3. 大会運営

徳島陸上競技協会としては25年ぶりに全国規模の大会を運営することになり、審判員数や審判員の技量、補助員の人数など、非常に多くの不安を抱えて大会準備を始めた。

審判員数は、様々な勧誘による新規審判員の加入や大学生の協力と、四国3県や全国高等学校体育連盟陸上競技専門部(以降、全国高体連)・日本陸上競技連盟からの支援により、最低限の人員を確保することができた。

審判員の技量向上については、前年度からの日本陸上競技連盟による大会での実地研修を丁寧に実施して頂いたことや大会当日にも現場で指導も頂いたことで、審判技能を維持することができたことが大きな要因と思われる。ご協力頂いた関係各所の方々に深く感謝申し上げます。

## 4. 大会中、発生した問題点とその対処

- (1) 女子400m予選において、スタート後約5秒後雷管が暴発した。競技者がその音に反応することなく競技が進んだので不利があったとは判断せずレースを続行させた。結果発表15分後までに抗議がなかったためレース成立とした。  
対応：抗議があった場合には対象組を準決勝に1組追加するなどの対応策を考えていた。スターターパートへは、暴発予防のマニュアルの徹底を再確認するよう伝え、再発を予防した。
- (2) 男子ハンマー投予選で投てきされたハンマーが補助ネット脇を抜けてテントに当たり、テント内の競技者選手の通路に落ちる重大なインシデントが発生した。幸いなことに周辺に競技者や競技役員はいなかったため怪我人等は発生しなかった。  
対応：補助ネットの位置を調整すると共にテント間を空け通路を変更した。
- (3) 広告規定違反のTシャツが散見された。  
対応：招集所のみでなく、現地での違反対応を行うこととした。成果は十分ではなかった。
- (4) 棒高跳において、跳躍した後にアップライトの位置が違っていたと抗議があった。  
対応：審判がミスを認め、5分待って再試技を行った。“設定後の連続試技は3分が正しいのでは”と課題を残した。
- (5) 男子走幅跳予選において、光波測定器の設定の不手際による遅れと以後の競技進行の遅れから、予選が3時間かかり決勝の招集まで45分しかとれなかった。  
対応：女子の走幅跳予選では、A・Bピットを同時に進行し、約2時間で競技を終了することができた。
- (6) 男子八種競技110mHにおいて、ハードルに強い衝撃を与えると高さが落ちる(低くなる)ものが散見され、その交換に時間がかかった。
- (7) 男子やり投予選において1回目の試技で、ファール判定の誤審があり。抗議を受け、審判長が動画を確認し有効試技と判断した。  
対応：審判長が誤審を認め、有効試技であると判断。1回目のやり直しとして全体の3回目試技終了後にその1回目の試技を行った。
- (8) 女子七種競技の走幅跳において、「計測地点を間違えていないか。」とTICに問い合わせがあった。審判長がビデオ監察で確認すると、着地点とは違う地点から計測を行っていた。  
対応：審判長は誤審を認め、3回目の試技終了後にその追加試技を行った。
- (9) 4X400mリレーの予選において、次走者がコーナートップの整列にとまどう場面があった。  
対応：以後のラウンドから、競技者(チーム)を判別し易いよう、全選手のビブスをレーンナンバーに変更した。
- (10) 女子走幅跳の決勝開始前に、Bピットのウレタン舗装の状況(暑さでウレタン表面が浮く)が、大変悪くなっていた。

対応：決勝をAピットで行うこととし、当日の全競技終了後、メーカーによる補修作業を行った。翌日には使用可能となった。

- (11) 女子七種競技やり投の穂先の痕跡判定について、「女子やり投時の痕跡判定と相違がある。」との指摘があった。

対応：これ以後、痕跡判定を担当する審判を固定し、裁量を統一した。

- (12) 競技の途中で無線インカム、大型映像装置及び空調の機器が原因不明の不調となった。

対応：施設管理者からメーカー連絡。また、再起動を行うなどによって対応した。

## 5. C級審判員について

審判員の不足は否めず、次のようにC級審判員で補った。当年度、5月以降に募集及び日本陸連登録を行った。

- (1) パート 4パート 合計15名

アナウンサー2名 放送部の生徒が、表彰式の進行を担当した。

出発係 4名 中学校での陸上競技経験者を中心に、競技者誘導や呼び出しを担当した。

競歩 5名 技術系情報通信コースの生徒を中心に、競歩における歩型判定結果のタブレット入力やレッドカードの累積集計などを担当した。(一部は大型映像装置のオペレーターを兼ねた)

風力 4名 マネージャーや中学校での陸上競技経験者により風力測定装置の操作を担当した。

配慮した点

- ・現役、陸上競技者以外から募集した。そのため、リハーサル大会には終始参加することができた。
- ・判定を必要とする部署にはつかないように配慮した。
- ・陸上競技の経験がある生徒を募集した。
- ・服装は補助員と同じで、胸章で区別するようにした。

改善の必要な点 大会期間中は十分な活動ができて運営に大いに貢献した。しかし、全国高校総体終了後も継続する意志を示す者は少なかった。

## 6. 効果を感じられたこと

- (1) 審判技量の向上においては、日本陸上競技連盟の丁寧な研修により、それまで全く全国大会を経験していなかった審判員も、全国高校総体の審判業務についての概要をイメージすることができ、大会本番につなげることができた。高い効果を感じられた。
- (2) 近隣の陸上競技協会から手薄なパートに優秀な審判員の協力を頂き、円滑に大会本番の広範な業務を果たすことができた。
- (3) 競歩審判員パートにおいて、その歩型違反の集計に専用アプリを作成し、タブレット通信で伝達することにより、集計の迅速性(失格伝達の迅速化)とアリーナの整然性確保に役立った。
- (4) アリーナ内に表彰式典と跳躍競技を同時に行うスペースが十分とれなかった。そこで、タイトな日程を円滑に行うため、メインスタンドロイヤルボックスで賞状授与セレモニーを行うこととし、跳躍競技の進行や表彰式待機の競技者に負担をかけず運営することができた。